

二〇一四年一月二八日

大島航路

宮城県漁協女性部の会長さんは気仙沼大島の在住で、以前に話す機会があった時、大島に来たら「亀山荘」という旅館に泊まるという勧められていた。宮城県内のカキ養殖の調査の一環で気仙沼大島を訪れることになったので、南三陸町の戸倉地区と歌津地区の取材を終えてから、その日の夜は大島に泊まる計画をたて、亀山荘に電話を入れたところ満室であった。やむを得ず計画を断念、戸倉の民宿に泊まった次第だ。

朝早く、戸倉の民宿「津の宮荘」から気仙沼に向かったが、復興関連の工事車輛が多く、ところどころで渋滞が発生、予定の時間よりも少し遅れて大島行フェリーの発着場に着いた。気仙沼のエースポートと大島を結ぶ航路は大島汽船㈱の二隻のフェリーがほぼ一時間のおきに一日一六便運航、また夜間の交通船が日に四便就航している。大島の始発は六時、夜間の気仙沼発は二二時三〇分なので、大島はまったく気仙沼の通勤圏になっている。

大島は面積九・〇五平方キロメートル、周囲二二キロメートルで、宮城県に一〇ある有人離島の中で金華山に次いで大きい。気仙沼湾の東に位置し、さらに大島の東側には唐桑半島が横たわる。本土と大島は、大島瀬戸を挟んで狭いところではわずか二三〇メートルしか離れていないため、従来から架橋の計画があった。東日本大震災で計画の実現を危ぶむ声もあったが、当初通り二〇一八年の開通を目標に、工事が進められている。

気仙沼湾々奥に位置するエースポートを出たフェリー「ドリーム大島」は気仙沼湾を南下し、大島の浦の浜漁港（二種）に入った。気仙沼漁港にはサンマ漁船やマグロ漁船が数多く碇泊、気仙沼魚市場もほぼ完全に復旧し、活



気仙沼漁港と大島を結ぶフェリー「ドリーム大島」

況を呈していた。湾の東側は高台移転の土地造成が急ピッチで進められ、赤褐色の土砂がむき出しになっている。しかし水産加工団地の護岸はまだまだ嵩上げが終わっていないところが随所でみられる。再建された建物はまばらで、加工場の復興は遅れている。湾の西側にはカキ、ホタテガイ、ワカメなどの養殖施設がびっしりと張り付いている。養殖施設の近くに来るとフェリーは速度を落としゆっくりと進む。気仙沼大島までは約二〇分を要した。

大島の二〇一〇年国勢調査時の人口は三二五五人、世帯数は一〇五五戸であった。震災後の二〇一四年一月末時点の人口は二九八〇人、世帯数は一〇九二戸で、人口は若干減少しているものの、世帯数はむしろ増えている。

宮城県漁協大島出張所

約束の時間を過ぎていたので、漁協へ急いだ。もともと島単独で大島漁協が組織されていたが、二〇〇二年に本土側の三漁協と合併して気仙沼地区漁協となり、さらに二〇〇七年の県一漁協合併で気仙沼支所・大島出張所になった。出張所の事務所は浦の浜漁港にあったが、津波で被災したため、内陸部に移転している。漁協では、小野寺さん（七十一歳）、小山さん（七十二歳）が待っていた。早速、事務所の二階に上がり、出張所長とともに話をうかがった。

二〇一四年度の資格審査時の大島の組合員数は正が二四六人、准が四四八人、合わせて六九四人である。一世帯一組合員制をとっているので、島の世帯の七割弱が組合員になっている。

大島では、ワカメ、コンブ、ホタテ、ホヤ、カキの浅海養殖とアワビ、ウニとマツモなどの海藻類を対象とする採貝藻、刺網、簀、小型定置網、釣りなどの沿岸漁業が営まれている。震災前の二〇〇九年の生産額は五・九億円であり、このうちワカメ養殖が一・六五億円、カキが一・四五億円、ホタテガイが〇・八八億円、その他が二億円

であった。ちなみに二〇一〇年はチリ沖地震の津波で被害を受け、四・七億円の大幅減となっていた。

震災後の二〇一二年度はワカメの単価が著しくよかったことから総生産額は一・七九億円であったが、二〇一三年度は一転してワカメの単価が下落、この影響で〇・八九億円に下がった。二〇一四年度上期はホタテガイの出荷が始まったおかげで一・三〇億円になり、二〇一四年度は二億円を超える見込みまで回復してきた。

大島はマグロ延縄漁業や北洋鮭鱒の遠洋漁業の乗組員が多かった。島の子どもの多くは水産高校を終えると遠洋漁業に従事した。船主は本土側に多く、島はもっぱら乗組員の供給地であった。かつてマグロ延縄漁業は儲かったもので、乗組員の給料もよかった。船で数年働くと家が建った時代もあったという。

小野寺さんは地元の水産高校を卒業してすぐに養殖業に従事、したがって遠洋漁業の経験はない。最初はノリ養殖を営み、その後、カキ、ワカメ養殖に転換、一九八五ごろからホタテガイ専業になった。一九七〇年代はじめの気仙沼湾の水質汚染がノリ養殖からの転換の契機となったという。

小山さんもやはり地元の水産高校を卒業後、気仙沼の冷蔵庫会社で冷凍技師として勤めていた。サラリーマンと兼業で一九六二年からワカメ養殖を始め、六〇歳で定年退職後、現在は本格的にワカメ養殖を営む。

漁協の事務所には、古文書などの資料が数多く保管されていた。戦後の漁業制度改革に関連した全国調査の時にこれらの資料が発見された。以後、神奈川大学常民文化研究所が継続的に調査を行い、これらの資料は「大島漁業協同組合資料文庫」と名付けられて漁協事務所内に保管されていた。しかし、事務所が津波で甚大な被害を受け、この貴重な資料は水没してしまった。その後、神奈川大学が中心となり、水没、毀損した資料を救出し、現在、古文書の修復作業が進められている。ゆくゆくは修復した資料を保管する収蔵庫が建設される予定であるが、漁協の移転先がはっきりしていないため、具体的な収蔵庫の場所は決まっていないという。

亀山と山火事

漁協で話を聞いてから、島の北側にそびえる亀山にむかった。亀山は大島を象徴する山で、標高二三五メートル



山火事で焼けた松林の伐採跡

である。山頂まで舗装された道路が整備されており、車で登ることができる。震災以前は山頂付近まで市営のリフトが運行されていたが、震災で被害を受け、撤去された。山の中腹に大島神社がある。なんでも一二〇〇年以上の歴史を誇る神社らしい。五〇段ほどの石段を登ると、荘厳な社殿があり、境内には大きなモミジが見事に紅葉していた。ここから島の東側の海が眺望できる。

外浜集落への分岐を過ぎ、さらに登っていくと、少し焦げた松の切り株が目立ち始め、その脇に小さな苗木が植えられている。山肌に、「東日本大震災の亀山火災を忘れるな、気仙沼消防署大島出張所」と書かれた木柱が立っていた。震災当夜の気仙沼市街地の火災は記憶に新しいが、市街地の火災は気仙沼湾を漂う瓦礫に引火し、その火が本土と大島の間にある大島瀬戸に到達した。炎は外浜地区から亀山の森林に引火し、火は頂上に至り、さらに南側に向かった。当時、北西から東への風が強く、亀山の半分が焼けた。島民は小学校に避難した。すでに、沖には米軍の軍艦と自衛隊のフリゲート艦が待機しており、延焼が激しい場合、小田の浜から海上に避難する予定だったという。幸い雪が降っていたため、地面の落ち葉に火がつかず、下草と松の樹皮を焦がした程度であった。ちなみに大島の島民は風呂と水は米軍艦の世話になったという。

亀山の頂上には木製の展望台が整備されていた。ここからは三六〇度のパノラマが広がる。南側には島の南部の丘陵地が手にとるように連なっている。西から北側にかけては気仙沼湾を眼下に階上から気仙沼の市街地が広がり、北側の大島瀬戸には養殖筏や延縄式養殖のブイが浮かぶ。

水産加工団地のある一角は空き地が目立ち、復興は遅れている。東側には唐桑半島が延び、小さな湾ごとに集落が点在する。ちょうど気仙沼漁港から一〇隻の大型漁船が隊列を組んで外海に向かっていった。



大島瀬戸に浮かぶカキ養殖筏

カキ養殖

亀山から下る道の最初の分岐に「かき養殖先覚者顕彰碑」が建っている。一九六七年十二月につくられた。もとは大島神社の境内に置かれていたが、神社拡張のため一九九〇年七月に現在地に移転したものである。この地におけるカキ養殖は地域経済に多大な貢献をしたことが、この碑文に現れているので、引用しておく。

「カキ養殖は大正の末頃鹿折浪坂出身の小野寺清氏によって天然粒カキを利用した地蒔式養殖法が行われていた。昭和初期に本県万石浦及び松島で種カキの採苗が始まり、これを利用したカキ垂下養殖法は既に万石浦において試みられていたが、この方法の極めて有利であることを知った小野寺清氏はいち早くこれらの新知識をとり入れ、気仙沼湾の立地条件に適合する養殖法の工夫に労苦を傾け、一九三〇（昭和五）年初めてこの方式による養殖に成功したのである。以来宮城県水産試験場及び先進地業界の指導協力を得るほか、さらに技術の研究と改良に努力を続けた結果、気仙沼湾を中心に広く各地に普及発展するに至ったのである。一九六五年の気仙沼湾カキ

養殖事業は経営体数七五二戸、養殖筏施設四八九一台、延縄式施設八五一台、その生産量は一六〇八トンに達している。（……）われわれは、ここにあらためて先人の功労に對し敬意と感謝を捧げるとともに、この業績を永く後世に伝えるものである」。

この分岐を左折した突き当たりが外浜の集落である。大島の最北端に位置し、大島瀬戸に面するこの集落は津波に襲われ、一部の家屋が流された。震災前は一三戸がワカメ、カキ、ホタテガイ、ホヤ、コンブを養殖していた。しかし、震災後五戸に減っている。カキ養殖は一一経営体が営んでいたが、現在は五経営体に減った。このうちの三経営体は水産庁の「がんばる養殖復興支援事業」でカキとホタテガイの養殖の再開に取り組んでいる。三経営体は震災前にカキ養殖筏八三台と延縄一〇〇メートル分であったが、事業最終年度には一〇五台、六〇〇メートルに増やす計画である。現地にはこの経営体の共同処理場が建っていた。

震災前の大島全体のカキ養殖経営体数は二七経営体で、その内訳はむき身出荷一九、殻付出荷五、両者の兼業三であった。震災前の二〇〇九年の生産額はむき身一・〇二億円、殻付〇・四三億円のあわせて一・四五億円、これはワカメの一・六五億円につぐ生産規模であった。

震災後カキ養殖を再開したのは一二経営体で、残りの一五経営体が廃業している。震災以前は田尻、大水、磯草、外浜、亀山の五カ所にカキの処理場があったが、津波ですべて流失した。

処理場の再建にあたって一カ所に集約化の方針が出された。再建のための自己負担額が当初予定よりも多くなったこと、さらに一カ所に集約されると、処理場まで通わなければなくなることがカキ養殖をやめた原因だった。加えてカキの種苗を、島周辺で自家採苗できず、種苗購入費に数百万円かかることが重荷になり、一年で収入になるワカメ養殖の方が有利であるとの判断が業種転換に拍車をかけた。とりわけ若い人ほど先行きに見切りをつけ、土木工事の作業員に転職したという。

大島で営まれているカキ養殖は筏式と延縄式の二種類である。筏式は波静かな大島瀬戸を中心とする内湾で営まれ、筏のサイズは一三×六メートルが標準で、この筏に一三八―一四五本の垂下連を吊るす。延縄式は航路に面した気仙沼湾側が漁場で、一〇〇メートルの幹綱をダブルで張り、垂下連数は筏式とほぼ同数である。垂下連の長さは漁場の水深によって異なり、内湾の浅いところでは四尋（約六メートル）、航路筋の深いところでは一二尋（約一八メートル）で、垂下連に吊るす原盤数は浅い所で一二、三個、深いところで二三―二五個になる。

震災後の二〇一四年一月までの年累計出荷額は、殻付が〇・三二億円、むき身は〇・四七億円、合わせて〇・七九億円にとどまっている。震災前の二分の一ほどだ。生産者が半分以上やめているのでいたしかたないが、殻付出荷がむき身出荷の倍となり、震災前に較べると逆転しているのが特徴である。むき身は漁協共販に出荷しているが、殻付は出張所の独自販売でメインの出荷先は北海道である。北海道以外では地元の「マルタ水産」や石巻の「丸ほ保原商店」などにも出荷している。ちなみに殻付カキの出荷時期は三―七月の春から夏にかけてであり、おそらく北海道で「夏ガキ」に化けて流通しているものと思われる。



防波堤の工事が進む津波が侵入した田中浜

津波の傷跡

島の北部は亀山がそびえ、島の南部は低い丘陵が続く。津波は島の東海岸の田中浜と小田の浜から侵入した。田中浜から侵入した津波は島を横断し、西側の浦の浜漁港に達した。ちょうど亀山の山麓にあたり、北部と南部がくびれた地形の場所である。一方、小田の浜からの津波は島の中央部をはしる道路に阻まれ、島を横断することはなかった。明治の三陸津波では沖から来た津波が島を横断したが、道路建設で地盤高が高くなっていたことが幸いした。

被災後数日は外部との連絡は遮断され、島は孤立状態になったのである。

この震災の犠牲者は三一人、うち漁協の正組合員は六人である。家屋の流失は一三六棟、半壊は六八棟であった。漁船約七〇隻が流され、養殖施設は壊滅的な打撃を受けた。養殖施設は二〇一〇年のチリ沖津波でも壊滅的な打撃を受け、一年かけて復旧し、ようやく始めようという矢先に東日本大震災に遭遇したのである。

北部の集落を回ってから南部に移動。気仙沼市役所の大島支所で『大島誌』を見せてもらい、近くの雑貨屋で養殖に関する部分をコピーした。

津波が侵入した田中浜では、高さ一〇メートルほどに土砂が積まれ、防波堤工事が進められていた。

観光と農業

漁業・養殖業以外の大島の産業は観光業と農業である。

島には十八鳴浜、小田の浜、田中浜などの砂浜があり、震災前は多くの海水浴客でにぎわっていた。また、亀山、小亀山、龍舞崎などの景勝地もある。島には旅館亀山